

氏 名	梶 山 雄 一 かじ やま ゆう いち
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 67 号
学位授与の日付	昭 和 46 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ナーガールジュナの哲学

(主 査)

論文調査委員 教 授 長尾雅人 教 授 松尾義海 教 授 武内義範

論 文 内 容 の 要 旨

「ナーガールジュナの哲学」と題する本論文は、Ⅰ．根本的立場、Ⅱ．ナーガールジュナの論理、Ⅲ．ナーガールジュナの宗教思想の三章に分かれ、その巻末に『中論』注釈家たちの論理が付せられている。別に「インド論理学の基本的性格」以下十二篇の参考論文が添えられている。

本論第一章ではまず、ナーガールジュナ（竜樹）の根本的立場は、その主著である『中論』第十八章の自我の研究に最もよく反映しているとして、この章の内容を叙述解釈する。ここでは『般若経』に伝えられる神秘的な直観は、そのままナーガールジュナによって継承せられ、それが彼の一眼論理主義的な哲学の背後に流れていると著者はいう。すなわち第十八章では自我の問題を中心に最高の真実が追求せられ、それが自我の執着への否定としての空の思想にほかならない。そこには自我と身心の関係や、本体と属性、所有者と所有物の関係などにおいて自我が考察せられるが、如何なる意味においてもそのような自我は本体（自性）として成り立たない。本体とは、事実の世界と日常なことばの世界とが対応一致するかの如くに人々が盲信することによって虚構せられたものである。この盲信の上に、判断や推理が虚構せられ、人間の煩惱や業もすべてここに発する。最高の真実は、このことばと思惟とを離れた神秘的な直観にあるとするのが、ナーガールジュナの立場であって、彼の『中論』はそれを、極めて論理的に説くものであった。このように神秘的直観と論理主義とが一体となっているところに、彼の哲学の特色が見られる。

第二章空の論理では、まず仏教一般、特に中観哲学の根本的立場として考えられる縁起ということばをとり上げ、この語に対するアビダルマ哲学以下の諸種の語義解釈を考証して、縁起とは継時的な因果関係と論理的な相対関係をを含めた依存性一般を意味すると、著者は指摘する。因果関係も論理的関係も、この縁起において成立つのであり、本体を固執する立場では、かえって関係一般が成立たないのである。そこに用いられたナーガールジュナの論理も、何かの主題について何らかの命題を主張するものではなく、中観の空の立場からすれば、およそ如何なる学説も如何なる命題も成立することはありえない。ナーガールジュナによれば、アビダルマ哲学や正理学派や勝論学派など、本体と現象とを二元的に区別する形而上学

が説く實在または本体とは、実はことばの対象（意味）、認識（知覚、推理、記憶）の対象にほかならない。著者はこのような本体を否定するナーガールジュナの論理を分析し、幾つかの類型に整理して、その一々を順次に本章の第三節以下第七節にかけて説明する。

まず第三節においては、本体を立てる立場では、原因と結果との関係が究極的には成立しえないことが、一か異かのデイレンマによって論証せられる。このデイレンマこそは、ナーガールジュナの論理の最も基礎的なものと考えられる。いわゆる四句分別による否定もまたここに適用せられるが、これも基本的には右の一か異かのデイレンマに帰するものである。

第四節では、この同じ因果の関係が、時間的空間的な分析において運動と変化の関係としてとらえられるが、その問題は、また次の第五節の主体とその作用の問題でもある。作用とは、自己が自己に働くか、自己が他に対して作用するかのいずれか以外にはないが、そのいずれもが本体的な哲学の立場では成立しないことが、同じくデイレンマによって指摘される。次いで第六節では、主体と客体の関係が論ぜられる。そこでは特にこの両者の相互作用が追求され、無限遡及と相互依存との二つの誤謬がそこに起ることをナーガールジュナはいう。本体的な意味において、あるものが他のあるものの根拠（ないし条件、原因）となると考える限りにおいて、そのような根拠は無限にさかのぼらざるをえないし、またこの困難を回避するために、あるものとあるものとが相互に根拠となると考えるならば、これは論理的には循環論証の謬りに陥る。同様な論理は、認識とその対象についても適用される。すなわち、本体として實在する対象によって認識が生ずるということも、逆に認識によって対象の實在が確立されるということも、ともに否定せられる。

第七節ではことばと対象の関係をまとめて述べる。ナーガールジュナは定義（名づけること）と定義づけられるもの（名づけられるもの）との関係を分析することによって、實在論者が考えるようなことばに対応する事実は究極的に成立たないことを示し、ことばも対象もともに本体がなく、空であると結論する。

最後の第八節では、以上のナーガールジュナの論理は、正理学派的なインド論理学とはその系統を異にし、現象の領域を離れて本体を問題とする限り、それは弁証法的であると考えられるという。そこに、彼のデイレンマの意味が見出され、四句否定における教育的意味が考えられ、また仮言的条件的論証が好んで用いられた所以も理解されるであろう。

第三章は、二諦の思想を中心とする。空の思想は、単なる虚無的なものとしてしばしば外部からの非難を受けた。すなわち、すべてが空であるならば、それは世間的な倫理や道德を、また出世間的な宗教を、破壊するものではないか、と。しかし中観の立場からすれば、空とはことばの實在化への盲信を否定するのみであって、かえって空によって道德も宗教も成立つのである。そのことを説明するものが、二諦の思想にほかならない。著者は世俗・勝義の語を解説し、この二諦が有部などの本体的な区別の哲学を逆転させるものであるという。すなわち現象は本体の影なのではなく、現象のみが真に實在であるような世界が空において展開する。空においては、最高の真実としての解脱が、それ自身本体をもたないことによって、これまた自体の空である生死の世界との区別がなくなる。そこでは迷悟一如であり、生死がそのまま涅槃であって、このような空の世界がまた、彼岸へのかけ橋として修道をも成り立たせるのである。

付論では、中観学派の二系統である帰謬論証派と自立論証派との論理に対する考え方の相異を、当時の

学問的背景とともに詳論し、その有する特色や難点を述べている。著者によれば、帰謬論証派の祖とされるブッダパーリタは、ナーガールジュナを論理的に表現しようとした最初の人であった。その後、自立論証派としてのバヴィヤはブッダパーリタを鋭く批判し、ディグナーガの論理学を全面的に受け入れることによって、中観の基本的立場を定言的に論証しようと努めた。最後に七世紀のチャンドラキールティは、帰謬論証派に属するとせられながらも、論理学に対して決定的に訣別した点では、ブッダパーリタとも異なるものとなった。

参考論文十二篇は、各種の問題を個別的に取扱ったもの、あるいは原典からの訳業であって、いずれも本論文がまとめられるための基礎であり、また本論文への補足となるものである。

論文審査の結果の要旨

『般若経』ないしナーガールジュナ（竜樹）の中観哲学に関する研究は、現在に至るまでわが国でも外国でも、多くのすぐれた成果を産み出している。著者はこれらの業績を自家薬籠中のものとするとともに、この学派の歴史の始中終に対し、またインドの思想史的な背景に対して、広汎な知識と周到な用意とを準備した。すなわち著者は、その梵・藏・漢の知識を駆使してナーガールジュナの基本的なテキストの殆んどすべてを渉猟するとともに、それらを当時の仏教以外の諸思想と交渉せしめて、その特色を浮き彫りにしている。この思想の歴史的展開についてはまた、十世紀ないし十二世紀に至る梵語諸文献の近時学界に発表されたものを利用して、学派の流れやその間の論争の進展を跡づけている。けだしこれは、この著者の独壇場というべきであろう。

最初に『般若経』や『大智度論』に説かれる空・無相・無願の三三昧を手がかりとし、『中論』の基調的思想をその発展として解釈していることは、そのヒントは他に得たものではありながら、著者の卓抜した理解を示すものである。これによって著者は、ナーガールジュナの立場を神秘的直観の上に立つ論理主義として描いている。しかし本論文において、著者は特にナーガールジュナの思想を論理的な面から解明しようとしたのであり、それに最も多くの努力がささげられた。随所に西洋の形式論理学との対比を敢えて行いながら、複雑なナーガールジュナの議論の立て方を分析し整理し、それを数個の類型に要約することに著者は成功している。この点は本論文の最も大きな功績というべきであろう。参考論文に見る著者の永年のバヴィヤの研究が、ここにすぐれた成果を結んだといえることができる。

もし隴をえて蜀を望むことが許されるならば、論理的な探究の広さに比して、宗教的な側面の掘り下げの少ないことが惜しまれる。二諦に関する竜樹の思想についても、バヴィヤとチャンドラキールティの異った解釈を対決せしめることによって、より深くその真意が得られたであろう。論理的な面では、著者自らが指摘するところの異系統としてのナーガールジュナの論理、その弁証法的な性格について、なお多くの説明が望ましかった。しかしこれらの点も、実は本論文の成果の上に立つことによって、はじめて正しく行なわれうる性質のものである。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。